

A DEAN MESSAGE

学部長メッセージ

なぜ外国語を
学んだ方がいいのか

外国語学部長 江花 輝昭

EBANA Teruaki
東京大学(文学修士)

■専門
17世紀フランス文学・文化

■担当科目
フランス語、
フランスの舞台芸術、
フランス芸術文化講読

外国語学習の効用

外国語を学ばないより学ぶ方が人生において益が大きい、と私は考えています。どうして外国語を学んだ方がいいのでしょうか。まず初めに、外国語運用能力を向上させることだけが外国語を学ぶ目的ではないということを強調したいと思います。人間という存在は、一つの文化の中で生まれ育ちその文化を生きていますので、自分の属する文化についての判断はどうしても主観的なものになってしまいがちです。その主観性を相対化し補正するためには、他文化の視点を自分の中に確保することがどうして

も必要なのです。さらに、自分および自分の属する文化を客観的に見るためには、一つの他文化を参照するだけでは不十分で、少なくとも別に二つの文化を参照点とすることが望ましいと思います。ですから本学外国語学部では、どの学科において、主として学ぶ外国語のほかに少なくとももう一つの外国語を必ず学ぶことになっています。

私たちは、他言語を学ぶことを通じて他文化を知り、自分とは違う世界認識の仕方を学ぶことができます。そういう意味で、外国語を学ぶことの目標がその言語をペラペラしゃべることにとど

まるのだとしたら大変残念なことだと思います。本学外国語学部は、そんなレベルの学びを最終目標に設定してはおりません。外国語を学ぶことで、母語が開いたなじみの世界が、その外国語が開く新しい世界に融合される効果を期待することができます。これが外国語を学ぶことの第一の魅力だと思います。

また、私たち人間は運命的に「今」と「ここ」に縛りつけられています。外国語を学ぶことによって、今ではなくここでもない時間と空間にかつて生きて活動していた人とも、書物を通じて交流することができるようになります。そのことが、「井の中の蛙」状態を脱して自分自身を客観視することにつながり、私たちをより謙虚にしてくれることでしょう。

よりよい外国語学習のために

外国語学習の効用は、外国語の運用能力を高め、私たちの世界認識を拡げることにとどまりません。外国語学習を通じて力量の向上が期待されるものとしては、たとえばですが、仕事において発揮される自律性、未知の状況において手持ちの知識を活用する能力、分析と総合をともに行う能力、未知なるものへの好奇心と精神的自立、対象に対する批判的なアプローチ、高度な対人コミュニケーション能力、人を説得するための弁舌、異文化への感性や適応力、企画に

対する自発性、創造性、責任感などを挙げるができるでしょう。これらはいずれも、社会に出てから大いに役立つことになるはずの能力です。本学外国語学部では、以上のような能力を涵養して、語学力を武器にグローバルに活躍することができると人間を育てることを目標としています。

もちろん学生の皆さんには、専門とする外国語の学習に一層精進していただきたいとは思いますが、しかし、外国語学習を効果的に行うために必要なのは、実は母語の運用能力であることは学問的に確かな事実とされています。ですから、母語である日本語の運用能力を高める努力も欠かせない、と私は考えています。日本語ができなければ、外国語も本当にできるようにはならないと自覚してほしいのです。母語を鍛えることは、その母語を用いて行う思考の質を高めることにつながります。確かな思考がなければ、話し相手に尊重される質の高い対話することは期待できないでしょう。そのためには、何でもいいたく自分に興味を持ってそうな古典とされる書物を読むことが欠かせません。古典的な書物を読むことは、今とここに縛りつけられた自分自身の限界を突破するためにも必要なことです。学生の皆さんには、「もっと本を読んでください」と申し上げたいと思います。